

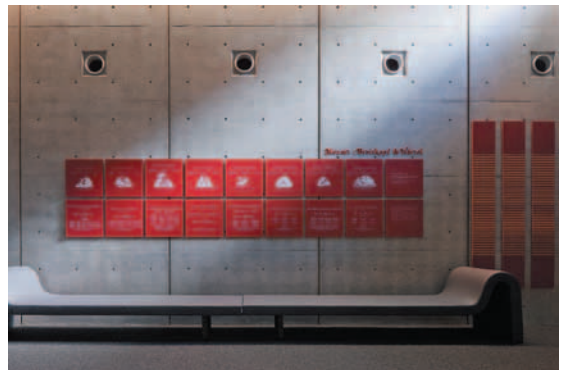
新1号館： サインパネルに使用された当館の貴重楽譜

新1号館にはサインパネルに当館所蔵の貴重楽譜がデザインとして使用されました。落成記念として、図書館ブラウジングでのテーマ展示を企画し、建物の写真、デザインされたサインパネル、使用された貴重資料そのものを展示しました（2011.8.29-9.30）。今後も継続して展示していく予定です。

サインパネルは地下1階から4階まで、各フロアの6か所に計30点設置（*）されています。その中から2点をここで紹介します。

新1号館正面玄関を入ると、2階のシンボルツリー（山法師）の木漏れ日をデザインした照明に迎えられます。その玄関ホールの両側にホワイエがありますが、その壁面のサインパネルに使用されているのは、Mozart全集のタイトルページと目次ページです。

モーツァルト、ヴォルフガング アマデウス、1756-1791：モーツァルト全集 第一部 ピアノ編
Mozart, Wolfgang Amadeus, 1756-1791 : Œuvres complètes de Wolfgang Amadeus Mozart. Leipzig, Breitkopf & Härtel, 1798-1806



18世紀の後半は音楽史に関する書物が相次いで出版され、それに伴って作曲家の個人全集の出版が始まるが、この全集はその先鞭をつけた出版物である。モーツァルトの死後に開始された曲集は、タイトルに“Œuvres

complettes”を置くが、字句どおりの全集ではなく、選集である。3部にわかれ、第1部がピアノ編でピアノ音楽、歌曲、ピアノを伴った室内楽曲の全17巻からなる。

縁飾りで飾られた緑色のカバー、当時の一流の画家による口絵、楽曲のインチピット付き内容一覧というデザインは全巻に共通している。第1巻は「モーツァルトの墓の前で悲しむ遺児を抱いたコンスタンツェ」であるが、それ以外は、ほとんどギリシャ神話にもとづくネオ・クラシックな図柄である。印刷はブライトコプフ社が発明した可動活字印刷であったが、この印刷方法は当時最も一般的に行なわれた彫版印刷に比べると経費がかかり、もはや時代遅れであった。ブライトコプフ社はこの全集の後、可動活字印刷を捨て、彫版やリトグラフによる印刷方法に転換している。

この資料は貴重書につき、利用に際しては制限があります。請求記号●S10-631～647 (M3-423～424)

誰でも一度は歌ったことがあるのではないのでしょうか？
2階に設置されていますので、探してみてください。

ジョルダーノ：カロ・ミオ・ベン

Giordano:Caro mio ben

London, Preston, 1785?



楽譜は弦4部の伴奏を伴ったスコアで、歌詞は英語とイタリア語。非常に有名な曲であるが、作曲者がジュゼッペ(1751-1798)なのか、その父親のトマソ(1733年頃-1806)なのかは不明である。ヘンデルの作として筆写譜が流通したこともあった。また曲がオペラの中のアリアなのか、カヴァティーナなのか、カンタータなのかも不明である。しかし、伴奏の編成が弦4部であることと、歌詞がイタリア語であることは、各国図書館所蔵の筆写譜に共通している。

この資料は貴重書につき、利用に際しては制限があります。
請求記号●S12-808 (電子ファイル：参考図書室情報端末)

※全30点の画像は、下記のURLで公開しています。
<http://www.lib.kunitachi.ac.jp/panel/panel.htm>

サインパネルに使用された資料30点のうち、1点はオリジナルではなく、自筆譜のファクシミリ版を所蔵しています。

